

多摩デポ通信 第56号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2021年3月3日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

● H P / <https://www.tamadepo.org/>

● E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

続くコロナ禍の中で

～多摩デポの動き～

理事長 座間直壯

感染症が続く中、多摩デポのこの1年を振り返ると、2月に予定していた、多摩デポ講座「都立中央図書館の資料修復及び書庫の見学」を中止したことに始まり、2020年度通常総会は会員の協力を得て、紙面参加の形式で乗り切ることになりました。同時に予定した山口源治郎氏の記念講演会も中止せざるを得ませんでした。11月に感染予防を徹底し、多摩デポ講座

「市民の図書館」の資料保存問題」として、何とか開催することができました。

9月からは理事会もZOOMでの会議に切り替え、集まる会議は開けていません。(株)カーリルとの研究会もリモートに切り替えて維持してきました。今後は講座等にもWEB公開を導入していかねければならないと考えています。

最近の特筆すべきニュースは、発足時から活動を支援していただいている「たましん(多摩信用金庫)の歴史資料室と連携し研究していただけることになったことです。多摩の地域資料を網

羅的に収集している「歴史資料室」の所蔵資料を、多摩デポが研究している統合検索を使って積極的に案内できることが期待されます。一方、1月末には元国立国会図書館副館長の安江明夫氏のご逝去されました。安江氏は、2008年5月の多摩デポ創立総会の記念講演会の講師をしていただき、『多摩デポブックレット第1号』はその記録です。

講演の最後には、我々の役割について「多摩デポは多摩の図書館をバックアップし、多摩の市民に資料を提供する。そうすることで多摩の地域を起こし、援ける。この三者、多摩の地域、市民、図書館を支える事業です。そう皆さんが計画さ

れている。けれども同時にそれは、多摩デポが、多摩の地域と市民と図書館の三者によって支えられるというところでもあるでしょう」と述べておられます。

多摩デポは三者を支え、三者に支えられる存在として、今後も活動を続けていかなければと改めて強く思うところではあります。

依然として出口の見えない状況が続きますが、皆様やご家族のご健康を心よりお祈り申し上げます。

□ 今号の内容 □

- ・ 続くコロナ禍の中で
～多摩デポの動き
理事長 座間直壯
- ・ 第39回多摩デポ講座の報告
- ・ 「図書館資料の里親探し」
年度中間報告(2) 事務局 吉田
- ・ (株)カーリルとの共同研究
定例会報告
- ・ 「たましん地域資料室」とは?
- ・ たくさんの感謝を安江さんに
事務局 雨谷逸枝
- ・ 新しい静岡県立図書館を求めて
佐久間美紀子
- ・ 会の現勢

第39回多摩デポ講座

“市民の図書館”の

資料保存問題

講師

山口源治郎氏
(東京学芸大学)

新型コロナウイルス蔓延のために、結果的に今年度最初で最後になってしまう多摩デポ講座を11月29日(日)に国分寺労政会館で開催しました。

当初5月の総会記念講演として予定していた内容ですが、総会の形式を変更したため開催できず、止むを得ず「多摩デポ講座」としての開催となりました。

参加者24名の皆さんには、マスク着用と手指消毒および距離をとつての着席をお願いしました。

この50年間を振り返ると、新しい図書館が次々と建てられる間は、出版点数が増

えて収集冊数が増えても、所蔵場所の確保に苦慮することはありませんでした。

しかし1980年から90年代にかけての出版点数の急増により、所蔵場所に困難を覚える図書館が増え、今世紀に入つては、「新規に受け入れる分だけ除籍せざるを得ない」状況に陥っている図書館が大多数を占めています。

資料提供を保証する資料保存については、解決策の決め手が見えていないことから先生のお考えをお話しいただきました。レジュメの見出しは次のとおりでした。

- 1 市町村図書館での「保存中心主義」批判
- 2 都道府県立図書館の市町村図書館に対する「支援機能としての資料保存」
- 3 多摩地域の図書館づくりと資料保存問題
- 4 資料保存問題の課題

最後に設けた質疑応答の時間では、いつもの講座に増して、現役の図書館員の方、県立図書館の新館のあり方の問題に関わる他県の住民の方、退職後も図書館の充実を願う元職員の方などから熱のこもった発言が相次ぎました。質問だけでなく、現状報告やレジュメを補強する意見をいくつも頂くことができました。

誰もが足が重くなるこの時期、静岡市から参加された市民の方に原稿を書いていただきました。6ページに掲載しました。

現在、この講演をもとに『ブックレット15号』を編集中です。会員の皆様にはできあがり次第お届けします。ので、参加できなかった方もお読みください。



「図書館資料の里親探し」
年度中間報告(2)

「図書館資料の里親探し」は、再びの緊急事態宣言下でも事業継続中です。前回の『通信』以後の動きをお知らせします。10月、12月、1月に、次の本の依頼がありました。

【里親を募集した本】

- ・ ドクトル・ジバゴ論攷 工藤正広著 北海道大学刊行会 1990
- ・ 定本柳田国男集 全31巻と別巻全5 筑摩書房 1962-1983
- ・ 平野謙全集 全13巻のうち7冊 新潮社 1975
- ・ 宮嶋資夫著作集 全7巻 慶友社 1983-1984
- ・ 野上彌生子全集 第II期 全31巻と別巻全5 筑摩書房 1962-1983

- ・ 宮地嘉六著作集 全 30 巻のうち 8 冊
- ・ 慶友社 1984-1985
- ・ 日本児童文学大系 全 30 巻のうち 8 冊
- ・ ほるぷ出版 1977-1978
- ・ チェーホフの生涯
- ・ 佐藤清郎著 筑摩書房 1966
- ・ 愛してるっ!! (韓国ドラマ) 1~47
- ・ TOKIMEKI パブリッシング 2004~2012

このうち 3 件には里親が見つかりました。『定本柳田国男集』は全巻一括で希望館がありました。『平野謙全集』と『日本児童文学大系』は欠本補充や汚破損本の取り換えに、一部の巻のみの引き取り希望がありました。里親探しの呼びかけは、基本的には多摩地域内の図書館に向けて行っています。しかし多摩地域で里親が見つからず、それ以外で必要

としている館がありそうで、調査時間にも余裕がある場合には、広範囲の図書館や類縁機関を調査したりもします。今回は『平野謙全集』のうちの 1 冊が京都府立図書館で欠本だったことから、同館に問合せました。

京都府立図書館は、京都府図書館等連絡協議会加盟館の相互協力の一環として、共同保存に取り組んでいる図書館です。全国公共図書館協議会の『2019(令和元年度)年度公立図書館における蔵書構成・管理に関する報告書』98~99 頁の「京都府域における共同保存の取組みについて」には、「府内に所蔵が 1 冊になった場合、基本的には所蔵館において保存に努めることとするが、保存が困難となった資料について、加盟館から京都府立図書館へ移管することにより、京都府全体としての図書館機能の充

実を図る」と、記されています。資料保存に積極的な館ならば、欠本補充にも取り組まれるのではないかと思い連絡したところ、快く受け入れてくれました。

このようなこともあり、今年度は 4 月からの合計で、2 自治体から 16 件 217 冊の依頼があり、9 件 74 冊について成立。里親館になってくれたのは 5 自治体という状況です。

また、前回の『通信』で、文部科学省の文化審議会著作権分科会の「図書館関係の権利制限規定の在り方に関するワーキングチーム」で「入手困難資料へのアクセスの容易化」や「図書館資料の送信サービス」に関する検討が行われていることをお知らせしました。その後検討が進み、年末に行われたパブリックコメントの結果も公表されるなどし、1 月 15 日に文化審議会

著作権分科会法制度小委員会がとりまとめた「図書館関係の権利制限規定の見直し(デジタル・ネットワーク対応)に関する報告書」が文化庁のサイトから見られるようになっていきます。

https://www.bunka.go.jp/s/eisaku/bunkashingikai/ch/osakuken/hoseido/pdf/92783201_01.pdf

日本図書館協会のメールマガジン第 1030 号(2 月 10 日発行)によれば、「2 月 3 日(水)に開催された文化審議会著作権分科会において、「図書館関係の権利制限規定の見直し(デジタル・ネットワーク対応)に関する報告書」がまとめられた。」「文化庁はこの報告書を元に今国会での法案・提出を目指して調整していく方針である」とのことです。

今後の動きに引き続き注目したいと考えています。

(事務局 吉田)

(株)カーリルとの 共同研究 定例会報告

多摩地域ではTAMALASがある程度普及してきているため、研究会では、ISBNの付与されていない資料の同定や、それによる除籍と保存候補の判断が容易で確実に行えることの研究を続けています。

一昨年、(株)カーリルのオープンブックカメラで撮影させてもらった調布市の多摩川関係の地域資料の書影を使って書誌同定の実験を先に進めることは一時中断しています。

定例会は10月にZOOM会議で再開しました。当初、(株)カーリルから、コロナ禍の全国の学校の長期休校に対して開発し無償提供した「学校向け蔵書検索サービス」を紹介されましたが、そのために開発されたシステムの応用として、「た

ましん歴史資料室」(以下、「歴史資料室」)の蔵書データへの活用が話題となっていました。その後、「歴史資料室」の保坂一房氏に参加してもらい、「歴史資料室」の資料の活用と多摩デポの保存事業の関係を模索し始めています。

「歴史資料室」には、個々の自治体の図書館の範囲を超えた、多摩の広範囲の歴史、民俗的な資料が網羅的に収集され、図書、雑誌以外に地図、絵葉書、チラシ、ポスター、写真など図書館では所蔵していない資料も数多く揃えられています。

独自システムの目録が整備され公開されているため、情報をより広く活用できないか、(株)カーリルのシステムを使った活用実験を検討しています。

一つの研究課題は、「歴史資料室」の所蔵データにはISBNが入力されていない

いので、このままではISBNをキーとした検索には対応できません。「歴史資料室」の資料に市販図書の割合は少ないですが、所蔵データにISBNを入力できればTAMALASに組み込んで検索することもできます。そのため、機械的なISBN付与の可能性を探っています。

ただしTAMALASの検索に「歴史資料室」を加えることはできませんが、TAMALASは多摩地域の公立図書館の最後の2冊を確認するのが目的なので、「歴史資料室」の蔵書の有無をそこにカウントするとはしません。

この研究会ではISBNのない図書館資料の同定識別の方法を研究してきて、それが宿題になっています。特に市販図書でない地域資料には、収集した自治体ごとに作成した目録記述が、

横断検索で調べると揺れているのが目立ちます。地域資料の、書誌割れによる識別の困難を容易にしたい。

「歴史資料室」が網羅的に収集し、独自に作っている書誌がそのために活用できないか。研究を始めたかと考えています。

「たましん歴史資料室」とは？

「たましん地域文化財団歴史資料室」はJR国立駅南口の多摩信用金庫ビル5階にあり、ここで『多摩のあゆみ』を編集し、収集した資料を公開しています。

『多摩のあゆみ』は1975年創刊の季刊誌で、2月発行の「特集・水の生きものたち」で181号。「たましん」各店で無料配布のほか、郵送料入金で送ってもくれます。毎号120ペ



―ジ程度はある充実した「茶の間の郷土誌」。巻末には数冊の「本の紹介」、「入手資料のご案内」がいつも詳しく載っています。

所蔵資料は図書約2万5千冊、雑誌約1万5千冊、地図約千8百枚、絵葉書約6千4百枚、チラシ・リーフレット約5百枚、ポスター約4千枚、写真約3万7千点、包装紙約千9百点。図書館の領域を大きく越えています。ホームページから検索でき、最近ではデジタルアーカイブも充実しています。アクセスしてみられたいと思います。

多摩デポとの関わりは、2008年の「第1回多摩デポ講座」に「地域資料の収集と保存―たましん地域文化財団歴史資料室の場合」で保坂氏に講演してもらい、これが『多摩デポブックレット第2号』なのですが、既にはぼ品切れ！

たくさんの感謝を

安江さんに

事務局 雨谷逸枝

国立国会図書館の副館長をされた安江明夫氏が1月29日に亡くなられました。まだ75歳という、あまりにも早いお別れになりました。2006年に国会図書館を退職されてからも、資料の保存についての深い見識を活かしたお仕事を続けておいででしたので、図書館関係者だけでなく、各方面の方々の悲しみはいかばかりかと思えます。

私が最初に安江さんにお目にかかったのは、安江さんがまだ国内協力課の職員でいらした頃。旧都立立川図書館が逐次刊行物センターに機能を変え、発展しつつある多摩の自治体の図書館から都立としての存在を認めてもらえるようにと暗中模索していた頃でした。

巨大な組織の国立国会図書館の方が、職員たった10人の小さな図書館の働きに目を向けてくださったのが不思議なくらいですが、その後、私たちの仕事ぶりを評価して、『実践から生まれた第二線図書館への道』（立川図書館職場会 1983刊）について『カレントアウェアネス』に一文を投稿してくださいました。遠い存在だった国立国会図書館が一気に身近なものに変わりました。

国際図書館連盟（IFLA）資料保存分科会など、国内外の資料保存の分野で活躍されていて、全国の小さな図書館への目配りも欠かされませんでした。私たち多摩デポの活動についても関心を寄せてくださり、当会設立の第一回総会で記念講演も引き受けていただきました。

この講演は『多摩デポブ

ックレット』シリーズの第1号『公共図書館と協力保存 利用を継続して保証するために』として刊行することもできました。

「資料の保存は原型を保つことだけを考えるのではなく、利用を継続して保証するにはどうしたら良いかを考えなくてはいけない」
「図書館は単独ではなく、協力し合いながら利用者に確実な資料提供をしていく組織」だ、ということを基本に据えるよう教えていただきましたと思っております。ほんとうにありがとうございます。

多摩デポは、これからも地域の図書館を資料保存の面で支えられるよう活動を続けていきます。どうか、遠くから見ていてください。



新しい静岡県立図書館を

求めて

静岡図書館友の会
佐久間美紀子

1 「丘の上のケンリツ」

静岡県立図書館が静岡市の中心街から現在の場所に移転したのは1970年のことだった。日本平に続く丘陵で、当時は茶畑の間にかがちらほら点在しているだけ、最寄の私鉄駅から上り坂を15分も歩かなければならない所であった。しかし1960年代という高度成長時代に作られた計画では、いづれ一大文化センターにして静岡駅からモノレールを走らそうという、壮大というか妄想的プランの一部だったのだ（正式名称が静岡県立中央図書館と、分館もないのに中央が付いているのもその名残り）。だが移転直後、74年の石油シ

ョックがすべてを頓挫させた。県立図書館は丘の上に取り残されてしまった。

一方、静岡市立図書館は、その県立図書館が移転した跡地にやっとできた新参者だったのだが、1980年代中頃には、資料費で県立図書館を凌駕するようになっていた（80、90年代を通じてほぼ倍以上）。やがて分館も順調に増え、1990年代終わりころには全国的に見てもかなり上位にランクされるサービスを提供でききるまでに成長していった。この時期「丘の上のケンリツ」は忘れられたような存在だったと思う。

県立図書館が動き始めたのは2000年頃からである。まず、図書館内部でいろいろな改革が積極的に行われていると伝えられてきた。それに呼応して市民の側は「県立図書館サポーターネットワーク」を立ち上

げ、賛同署名を集めて専門職確保と資料費増額の要望書（*）を知事に提出した。翌年にはなんと二つとも（資料費の大幅な増額と司書職公募）が実現したのだ。図書館と市民の協働ということが、お題目ではないリアルな可能性として現れたと思えた。

やがて図書館の床に亀裂が見つかり、新築移転か大幅改修かと議論されたすえ、2018年、JR東静岡駅前に移転することが正式に決まった。県立図書館は半世紀ぶりに丘から降りてくることになったのだ。

2 県立図書館という問題

新しい県立図書館ができることになったが、県民全体の関心事には余りないないように見えた。大多数の県民にとって図書館とは市町図書館のことだった

からだろう。東静岡は、浜松市からだとしてJRで片道75分・1340円。伊豆の下田市からだとも乗り継ぎ2回で3時間3千円余かかる。直接利用をイメージしたら関心外になるのも無理はない。そしてそれは県職員や県議会議員も同じではなからうか、というのが私たちの心配だった。県立図書館には市町図書館とは違うレベルのサービスがあり、それは距離にかかわらず県民誰もが等しく享受できるものでなければならぬ、というPRがまず必要だ。この「県立図書館の問題」ではなくて「県立図書館という問題」は、以後たびたび経験させられることとなる。サポーターネットワークの跡を継いで2017年「新たな県立図書館を望む会」が結成された。そこが要望書や提言書（*）提出とともに力を入れて取り組ん

だが、県立図書館は市町図書館とどう違うかということを強調した。パンフづくり（「県立図書館ことはじめ（*）」「図書館見学マニュアル・県立編（*）」だった。また市町図書館支援という役割を“見える化”するために、県内市町図書館へのアンケート調査を行い、まとめの報告書（*）も作った。そうした資料はすべて県議会議員にも配った。ささやかではあるがこうしたロビー活動は、じわじわ効果を及ぼしていったと思う。

3 図書館評価の新しい指標

図書館評価といえはまず出てくるのが、入館者数と貸出冊数という大変わかりやすい指標である。この二つの数字の強調は戦後の市町図書館の発展に大いに貢献したが、反面、他の指標

を忘れさせることにもなった。その最悪の例がツタヤ図書館のマスコミ評価の高さだったと思う。

もつとも、少し前までは私たち自身がその指標を利用して図書館PRをしてきたのだから大きなことは言えない。1990年代に図書館関連団体三つが静岡県知事と面談する機会を持ったのだが、その時にも貸出者数を示して、図書館はいかに集客力があるか強調したのだった。そして確かにその数字は効果があり、翌週の講演会か何かで、知事は早速その話を持ち出したと伝え聞いた。図書館の集客力を人の集まるまちづくりに使う、このコンセプトが行政に対してどんなに大きな（ときに偏った）影響を及ぼすかは、やがてゆっくりに見えてきて、今やほとんど手に負えなくなりそうな勢いである。

そうした危機感もあつて、静岡図書館友の会は「しずとも図書館を知るシリーズ（*）」を作ったし、図書館友の会全国連絡会は図書館評価プロジェクト（詳細は『みんなの図書館』2020年5月号に掲載）を立ち上げている。そして何とか数字に現れない図書館サービス的重要性を示そうとしてきた。しかし結局のところ、手間のかかる評価や長い説明は単純な数字の知名度を押しつけることは難しいと実感せざるを得ない。

市町図書館でさえそうなのに、ましてや県立図書館である。行政としては、リニューアルオープンで入館者数・貸出冊数が飛躍的に伸びた、とPRしたいに決まっている。もちろん図書館の側だってそれなりの結果は出したい。だが、もしその目標だけが独り歩きすると、出来上がるのは市立

図書館の亜流でしかないだろう。それだけは避けたい。

間の悪いことに東静岡駅周辺は静岡市立図書館サービス網の空白地域で、このへんにもう一つ分館をほしいとみんな願っていた。一時期は、新しい県立図書館の一角に市立図書館サービスコーナーを作ってリクエスト本を受け取れるようにしてほしいと要望しようかと話し合ったりしたくらいだ。周辺住民にとつてうれしい話なのは確かだし、それを否定することはできない。さて、どうするか。

じつは今度のコロナ禍で新館建設は数年遅れることが決まった。災い転じて、私たちには考える時間が与えられたことになる。

4 見知らぬ明日

市町図書館へのアンケートで見えた新しい県立図書館

館への要望は、人と資料への支援と要約できる。

・人材育成（専門職確保や講師派遣、研修など）

・ネットワーク（協力貸出や相互貸借と物流システム確保、地域資料マークの提供）

・資料の収集保存（専門書の収集・地域資料や雑誌バックナンバーの保存・デジタル化支援）

これはある意味、予想通りの結果である。どれも図書館サービスの基本中の基本なのだから。県民の多くは地元の市町図書館を通じて県立図書館サービスを受けており、市町図書館支援策こそが全県民へのサービス充実策だと、このデータから言っていくことはできる。市町図書館からの意見や要望は表に現れることが少ないので、このアンケート結果は貴重だし、今後有効に使っていただけるだろう。

だが、市町図書館が求めていることと県民が求めていることと100%重なるとは限らない。高度成長期ならば、「それではその双方を実現しよう」などということもできたし、可能性もあったかもしれない。が、これからは厳しい人口減少時代に突入する。安直に拡大案を出すわけにはいかないのだ。

日本は100年かけて4千万人から1億2千万人まで増え、こんどは100年かけて6千万人くらいまで減ると予測されている。それがいつたいていどういふ社会を生み出すのか、ほんとうに予想もつかない。が、当然税収は減るだろうし、人口が減れば利用者も減るから、貸出冊数の指標だけ見て図書館は衰退したと評されるかもしれないのだ。

新しい県立図書館は、縮小化時代の新しい図書館に

ならなければならない。私たちが当たり前と思っていた日常はコロナであっけなく消えた。この先に来るのは見慣れない世界、過去の経験が役に立たない世界だ。もちろんそういう時にこそ図書館が持つ情報は重要になるのだが、そのための入れ物として、どういう図書館を構想すべきだろうか？「丘の上のケンリツ」を構想したような時勢を読み間違える愚を繰り返さないためには、コロナが与えてくれた猶予期間を何とかうまく使ってこの難問解決の糸口を見つけられれば、と願っている。

「先達はあらまほしき事なり」多摩デポのような先達のいてくれることは、数少ない明るい話題だと思う。

(*)印の資料は、静岡図書館友の会ホームページにアップされています。

★会の現勢

2021年3月1日現在

●正会員

(個人会員82名)

(団体会員2団体)

●賛助会員

(個人38名)

(団体1団体)

●年会費

正会員 五千元

賛助会員一口二千元

会費がまだの方は、納入をよろしく。

多摩デポは模索しながら歩み、現在は、総会準備中です。直接会える機会がどうしても限られるため、活動への意見をぜひメールなどでお寄せください。お願いします！

メールアドレス：

depo_tama@yahoo.co.jp

